

面を試算した後で今後の対応策を考えたい」（広報部広報グループ）とする。また、音更の十勝主管工場の主力がバターと脱脂粉乳製造という、よつ葉乳業（本社札幌）は「影響がないとはいえないが、これまでも国際競争を見据え、低コストで生産できる工場体制の確立を進めてきた。バターは多くのユーザーから高い評価をもらっているアイテムの一つ。今後も生産者の負託に応えられるよう、製造量の維持拡大を図っていく」（伊藤正志・総務広報グループ課長）としている。

ただ、全国的にはバター不足が続いており、6月から追加でバター1万トンを緊急輸入している。今回の新輸入枠を全量バターに換算しても5600トン程度であることから、関係者の間では「影響は限定的」との見方もある。

幕別町新和で牛220頭を飼養する妹尾靖広さん（53）＝JA幕別町酪農部会長＝は、出産する牛を横目に「消費者の感覚からすると、バターがないのに輸入は駄目とはならない。私たちにできることは一生懸命、安心・安全な生乳を搾るだけ」と複雑な心境を語る。妻と父、ス

タッフ数人を抱え牛の育成と哺育にも励むが、「人の確保が年々厳しくなっている。TPPによって農家の収入が下がると、払う給与にも影響し、ますます人が来ない」と眉をひそめる。

道内の生乳出荷戸数は減少し続け、十勝でも昨年度は約5%減少するが、生乳量は、酪農法人などの規模拡大で何とか維持している状況だ。全道一の生産生乳量（2014年度は1万8763トン）を誇るドリームヒル（上士幌）の小椋幸男社長（64）＝十勝酪農法人会会長＝は「TPPによるグローバル化は避けられないと思うが、国には酪農家の収入と展望を安定させる長期的な対応を求めたい」と注文を付けた。

「酪農の規模拡大は軽く億単位になる」。関係者は口をそろえる。串田組合長は「TPPの全容が見えず、先行きが不透明な状況では、投資を控える農家や、離農もますます増えるだろう。そして乳量が減る一の悪循環。これまで通り、自助努力はしつつ、しっかりと政府に対策を求めている」と力を込めた。

TPP十勝の試練③

2015年10月7日

畜産 経営対策 見えぬ財源

段階的に関税削減



これからの牛肉生産に不安を抱く
加納さん

大反対を押し切って大筋合意してしまった。この先どうなるのだろうかという不安ばかり。これからの国内対策を早急に示してほしい」

士幌町で肉牛約7500頭を飼育する西上加納農場の加納三司専務（61）は、環太平洋連携協定（TPP）交渉の大筋合意を受け、今後の肉牛生産に不安を募らせている。

牛肉は現行38.5%の関税を協定発効時に27.5%、16年目以降は9%に削減する。米国産牛肉などは十勝で生産の多い乳用種雄の牛肉と競合するとされ、大きな影響が懸念される。

関税が下がることで輸入牛肉の価格が下がる。安い牛肉が大量に入ってくると、国産牛肉の価格もつられて下がるとされている。国産牛肉価格の下落は、肥育農家の収入減につながる。

生産コストが市場価格を上回った場合、その8割を補てんする補助金があるが、その財源は関税だ。関税の引き下げによって、関税収入は減少するが、政府はその代わりとなる財源確保について説明していない。加納さんは「補助金がなくなれば、経営が続けられないくらい影響は大きい」と補助金制度の継続を訴える。

また、輸入が一定量を超えると関税を引き上げるセー

フガード（緊急輸入制限）は16年目以降、4年間発動がなければ廃止される。加納さんは「際限なく外国産の牛肉が入ってくるとのこと」と危機感をあらわにする。

消費者にとって、牛肉価格が安くなることはメリットではある。だが、現在は国産と外国産が競合していることで現在の価格が形成され、全て外国産に置き換わった場合は外国の言い値で価格が引き上げられると指摘する声もある。

安全・安心という面でも、米国で肉牛の成長促進で投与しているホルモン剤が、乳がんなど人間のホルモン依存性がんの発症に影響を及ぼしている可能性があるとの研究もある。

昨年度の十勝管内JA取扱高で畜産は1573億円と、56.2%を占める。芽室町で肉牛約4000頭を飼育する大野ファームの大野泰裕代表（51）は「地域の基幹産業をどう守るのかという問題もある」と指摘する。加納さんも「日本の食糧をどうするのかということ、政府は考えているのか」とげげんな表情を浮かべる。

「輸入牛肉と国産牛肉との差別化を図り、消費者に選択してもらえるようにするしかない」。大野代表と加納さんは口をそろえた。

輸出拡大に期待の声もある和牛に関して、サンエイ牧場（大樹町）で和牛を生産する十勝和牛振興協議会の鈴木英博会長（64）は「海外に輸出するチャンスではあるが、国内需要に加えて外国に輸出するだけの生産力が付いていくかは分からない」と話す。「和牛の生産は落ち込んでいる。生産者が先行きに不安を感じて離農が進み、さらに生産が落ち込んでいくことが一番心配」としている。